

漱石『虞美人草』糸子の着物

Junko Higasa 2016.11.19

ある日の糸子は、乱菊文様の緋の着物を着ている。緋といえば久留米緋がある。久留米といえば九州である。広く九州に関係する人物といえば西郷隆盛が浮かぶ。西郷は九州諸藩連合のために久留米に遊説に赴いている。糸子は裁縫の鉢に縮緬で作った猿を付けている。縮緬は高級絹織物で、「古来日本」を象徴する「過去の女」である小夜子がこの着物を着ている。菊、絹に象徴されるものは、朝廷である。また漱石作品中「猿は国家、蟹は国民」に例えられるように、猿に象徴されるものは幕府・政府である。そして鉢に象徴されるのは「切る」という行為である。鉢は和鉢である。和鉢は日本の精神を象徴する。

『虞美人草』は、東京・大阪（関東・関西）の朝日新聞の連載小説なので、漱石は双方の読者に気を配り、そこに桓武天皇から鎌倉幕府までの背景を織り込んだ。その中で、糸子の着物には江戸幕府と京都の朝廷の関係が織り込まれているように見える。鉢と猿の関係は、京都で強気になった幕府に対する倒幕の動きで、そこには維新最大の功臣であり逆賊である西郷隆盛の姿が垣間見える。

そして菊は奈良時代に薬草として中国から伝来したもので、不老長寿を表し、その文様は縁起が良いと言われる。糸子は旧さと新しさを兼ね、個性を尊重する女である。日本の良き精神を失わず、西洋の良さも取り入れて、一枚の着物を縫っていくだろう。